

金井東裏遺跡の方形周溝状遺構

友 廣 哲 也

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1. はじめに

2. 方形周溝状遺構

—— 要 旨 ——

平成26年金井東裏遺跡で方形周溝状遺構を確認した。概要は方形区画が明瞭な遺構であり、さらに中央の方台部の四隅には小穴が確認されている。方形周溝墓であるとすると、今まで確認されたことのない企画性と構造を持つことになり、また方台部の四隅にある小穴や、方台部に埋葬施設のないことから墓とすることが難しい。出土する土器は弥生時代中期前葉を主体とする時期にある。弥生時代中期前葉の方形周溝墓は群馬県では確認されたことがなく、弥生時代中期に確認できる方形周溝墓は中期後葉であり、形態は四隅切れ方形周溝墓である。これらの事を検討すると、時期の問題、形態の問題、構造の問題から考えて、弥生時代の方形周溝墓との断定は難しい。また群馬県内での方形区画が明瞭な遺構や墓は、古墳時代に入らないと確認されていない。以上の事から言えるのは、遺構が榛名山6世紀の火山灰で覆われているため、時期は弥生時代中期以降から古墳時代中期の間で、方形区画を持ち小穴を方台部の四隅に持つ遺構とすることができる。

キーワード

対象時代 弥生時代・古墳時代

対象地域 群馬県渋川市

研究対象 方形区画・小穴を持つ構造物

1. はじめに

金井東裏遺跡で甲を着装した古墳人が6世紀初頭の榛名山火砕流堆積物の下から現れた。このニュースが全国に流れたのは平成24年の12月である。

その後も、金井東裏遺跡では、鉄矛、鉄鏃、さらに3人の古墳人が発見された。そして、2基の古墳や多量の遺物が集積された祭祀遺構なども見つかり、古墳時代の重要な遺構や出土品が多数確認できたのである。その後、遺跡は3回目の榛名山噴出軽石で2mから3mの厚さに覆われ、人間が生活した痕跡は中世まで確認することはできない。古墳時代後期の社会は軽石で壊滅状態になったと考えられる。古墳時代の遺構、遺物は榛名山噴火の火山灰、軽石で埋め尽くされたのである。

金井東裏遺跡は古墳時代以外にも大変貴重な遺構や、遺物が出土している。縄文時代前期の集落、中期の柄鏡形敷石住居跡、縄文時代の配石遺構、弥生時代中期の再

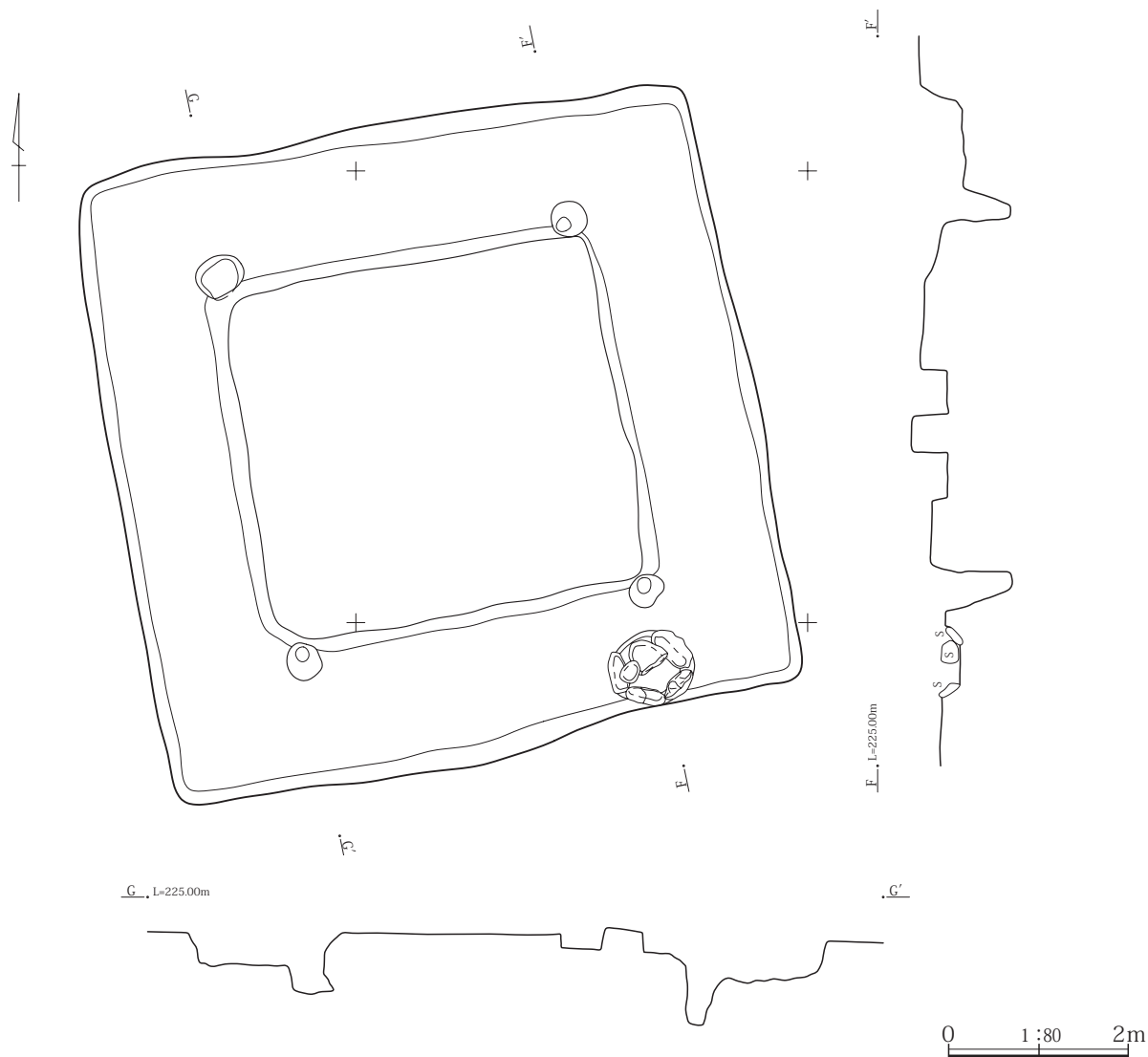
葬墓(?)、後期の住居跡等々、様々な遺構が検出されている。

その中で、金井東裏遺跡第7区から、方形周溝状の遺構が確認されたのである。7区は金井東裏遺跡南側にあり、甲を着た古墳人の南約200mに位置する。

2. 方形周溝状遺構

方形周溝状遺構が検出されたのは、金井東裏遺跡の南端に近い台地上である。榛名山東麓の東西に走る谷を挟んだ南側で本年度調査の金井下新田遺跡に隣接している。金井東裏遺跡で確認できた火山灰、火砕流堆積物は、この地域一帯を覆い尽くしていた。この結果、榛名山の軽石や火山灰を取り除いた時に、遺構の部分がくぼんだ状態で確認することができた。実際調査を開始すると住居跡の周庭帯であることがわかった。

方形周溝状遺構もこの例に漏れず、方形の溝幅が広



第1図 金井東裏遺跡1号周溝状遺構

く、中央部が方形状にくぼんでいた。このため当初は住居跡として調査を開始した。土層の堆積を観察するためにベルトを十字形に設定した。ベルトを残し住居跡と同様に周りを掘り下げていくと、床面ではなく方形に巡る溝が現れてきた。この結果、住居跡ではなく、方形周溝墓の可能性を視野に入れながら、さらに掘り下げることになったのである。古墳時代の住居跡群の下で確認された遺構であるから、弥生時代の周溝墓と考えていた。確かに出土遺物は弥生土器で、時期は大半のものが中期で、群馬県内では神保富士塚式並行と考えられる。形状は方形を呈している。このため仮称1号方形周溝墓とした。出土遺物は溝の覆土から弥生時代中期の遺物が出土し、後期の土器も多少覆土上から出土した。また溝の最底面に張り付いて出土した土器は弥生中期神保富士塚式並行の土器である。特筆されることは溝の覆土からは土師器が一切出土しないことである。方形周溝墓の溝の平面形状は方形で、浅く幅広の溝である。(第1図)

従来、群馬県内で確認されている弥生時代中期の方形周溝墓は少なく、高崎市三ノ丸遺跡例など数例を数えるのみである。三ノ丸遺跡例は四隅が切れる形態で、出土遺物は中期後葉以降にあたる。県内での弥生時代中期に確認されたものはすべて、弥生時代中期中葉以降で土器形式は栗林式土器(竜見町式期)に分類されるものである。また周溝の断面形状はすべて逆かまぼこ状である。群馬県内では三ノ丸遺跡例が示すように、弥生中期の周溝墓は四隅が切れるもので、さらに後期に入ると四隅切れ方形周溝墓に円形や方形が加わる。遺跡例は日高遺跡、新保遺跡、有馬遺跡等に確認することができる。後期に入ると周溝墓は群馬県内では広く確認することができ、古墳時代前期に入ると方形区画の明瞭な周溝墓が増える。

金井東裏遺跡の方形周溝墓を見ると、出土する土器は弥生時代中期前葉に比定される。もし方形周溝墓である

とすると県内最古ということになる。周溝の形態をさらに考えると、平面形態は明確な方形を呈し、正方形に近い。方台部の形状も、方形を意識していることがわかるように構築され、弥生時代と言うよりは、むしろ古墳時代に近い形状である。さらに方形台部の四隅に小穴が確認された。さらに方台部内には埋葬施設は検出されていない。弥生時代中期の方形周溝墓であるとすれば、従来の群馬県内の弥生時代の周溝墓の常識を覆すものである。

このため、埋葬施設がない事も勘案し、金井東裏遺跡では「方形周溝状遺構」と呼称を改めた。

ここで方形周溝状遺構の規模を確認したい。方形区画の規模は1辺約7m、方台部は、南北4m、東西4.5mを測る。周溝の規模は幅約1.5mと均等である。方台部四隅に穿たれた小穴は南東部をP1、南西部をP2、北東部をP3、北西部をP4とした。各々の規模はP1が径50cm、深さ90cm、P2が径40cm、深さ80cm、P3が径40cm、深さ80cm、P4が40cm、深さ80cmを測る。(深さは方台部の上から計測。)

方形周溝状遺構は榛名山噴出の火山灰の下に確認され、時期は古墳時代以降ではない。弥生時代中期の土器を出土すること、また、小穴が方形周溝状遺構に伴うものであることも発掘調査時に確認をした。従って、時期は弥生時代中期から古墳時代中期の間にあることを示している。この遺構の溝の形状は第1図のエレベーション断面で見ると底面を平坦に掘り、その上にロームを貼り付けている。調査が進むと方形周溝状遺構の南東部に配石が現れた。配石の中央部には焼土が確認され、配石炉と考えられる。配石は覆土中位に構築され、弥生時代の土器小片が出土した。さらに、配石遺構の下から弥生時代中期に一般的に認められる石鍬が出土した。このことから弥生時代中期のある時間内に方形周溝状遺構が造られ、溝が埋まった後に配石が造られている可能性が考え



写真1 1号方形周溝状遺構



写真2 1号方形周溝状遺構 方台部下げる途中

られる。ここまでを整理すると、この方形周溝状遺構の平面形状は方形区画が明瞭で、方台部に埋葬部は確認できなかった。方台部四隅には小穴があり、出土土器はすべて弥生時代中期、後期が少々、土師器は全く出土していない。金井東裏遺跡の調査担当者間で時期や遺構の性格について協議したが、火山灰下面から弥生時代中期の間にあること以外は明確ではない。このため方形周溝状遺構の方台部全体を上から薄くスライスしながら下げることにした。この間に出土した遺物は小さいものもすべて図面に落とし、レベルを押さえながらロームの面まで掘り下げることにした。筆者の見る限りは、すべてが弥生土器であり、土師器は全く出土していない。

しかし、群馬県内の周溝墓に限らず、方形区画が明瞭になるものは古墳時代にはいつてからであり、本遺構のような方形区画を持つ弥生時代の方形周溝墓を筆者は確認できていない。

ここまで金井東裏遺跡検出の方形周溝状遺構の時期、規模形状を示してきたが、実際に本遺構がいったい何の施設であるか目的や構造をも含め、理解できていないのが現状である。筆者は類例をあたってみたが、似たような形状の遺構はあるが、これまでのところ、時期が共通する事例に接していない。方形区画が明瞭なのは古墳時代の建物構造などがあるが、本遺構の出土土器は弥生土器に限られている。また溝の底面は、確認された所は部分的であるがロームを貼り付けて、平坦面を造っていると考えられる。

ここまで金井東裏遺跡検出の方形周溝状遺構の紹介をしてきたが、調査担当者である筆者としては、小穴に柱穴とする構造物、モニュメント等の性格等々確たる結論は出ていないのが実際である。今後検討を続ける事としたい。同じ調査区内では弥生時代中期の土器が多数出土し、数十m北では再葬墓が確認されている。弥生時代中期の遺構、遺物が集中する区でもある。

方形周溝状遺構については今後も類例を探すこととして、結論のない文章であることはご容赦願いたい。未だ整理作業以前での、資料紹介とさせていただきたい。

本遺構に関しては石川日出志氏、柿沼恵介氏、設楽博己氏、若狭徹氏諸氏のご教示、ご指導をいただきました。ここに記して感謝いたします。